説教要旨　「主は心によって見る」

サムエル記上　１６章１～１３節

二年振りに吾妻教会の皆様とお会いでき喜びに溢れます。キリスト誕生より１０２０年ほど前のことでした。預言者サムエルは新しい王に油を注ぐため、油を入れた角を携え旅立ちました。

サムエルは旅の終わりに、ベツレヘムのエッサイの家を訪ねます。彼の息子たちと長男から順に面会しました。いずれもその容姿のすばらしさにこれこそ油注がれる者だ、と思いましたが、主の返答は「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」(16:7)というものでした。顔で判断がつくなら、警官や裁判官の仕事は今よりずっと楽になるでしょう。わたしたちも「人は外見によらないと」聞いて、なんだかホッとします。　しかし実際は、自分で思うほど自身のことが分かっていないのです。　志の輔の落語に、画廊にて「ああ、これはゴーギャンね」「奥様、素晴らしい。よくご存じで」　「ああ、これはピカソね。」「・・・いえ奥様 それは・・・鏡です。」

最後に末っ子のダビデ立たせたところ「その子に油を注げ。これがその人だ」圧倒的な主の御声に、サムエルは少年ダビデに油を注ぎました。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになったのです(6:13)。

では、 主がご覧になる人の心とは何を指すのでしょう。もうお判りのように、主なる神との関係をご覧になるのです。主を信じて従い、主と共に人生を歩む人なのか、その点をしっかりと見分けることに間違いありません。それは不誠実や愚行を繰り返しては自らの不信仰を嘆き、しかしそれでもなお主にすがりついてでも御跡について行きたいと願う、私たちの悔いた砕けた心の事でしょう。

（２０２０・８・２３　説教者：指方周一）